

# 日本語「み(身・実)」の語史

## A Study of History of The Japanese Word ‘Mi(Flesh, Fruit)’

柏 原 卓

Suguru KASHIWABARA

(和歌山大学教育学部国語専修)

2013年10月4日受理

### § 1 課題と方法・資料

#### 1 課題

本稿の課題は、人間や動物の身体という意味を持つ「み(身)」を中心として、同根とされる「み(実)」(注1)との異同を考えた後、古来「み(身)」がどのような意味上の変化を遂げて多義語となっているのかを考察することである。題目を「み(身・実)の語史」としたが身体の「み(身)」を主な内容とし、必要な範囲で「み(実)」に言及する。また、単純語「み(身)」だけでなく複合語「身・ー」「ー・身」をも参照する。一般に複合語・派生語に古形や古義が保存されることが有るからである(注2)。

今回は詳細な語史の実証研究にまでいたらず、次項2で記すように辞書の意味記述と用例を通して概観をし、今後への足がかりを得ようとする。

#### 2 方法・資料

前記の課題にしたがって『日本国語大辞典』を主素材としつつ、項目選定にあたっては北原保雄編『日本語逆引き辞典』と『新明解国語辞典』『大辞林』の電子版の後方一致検索を援用した。電子版は最新版を活用するに至らずやや古い版であるが補助手段としては十分と考えた。また分類と年代配列のために表計算ソフトを使用した。これらの使用方法は次のとおりである。

##### (1)単純語「み(身)」の意味分類

『日本国語大辞典』の「み(身)」の項でなされている意味分類を便宜的に基準とし、この分類を複合語にも適用した。分類の妥当性については他の辞書も参照して検討したが重大な支障は無いと考えた。

意味分類項目を簡略化して示すと次のようである。

①身体 ②肉 ③自身 ④ありさま ⑤地位 ⑥生命

⑦身振り ⑧誠心 ⑨身内 ⑩衣類の胴 ⑪内容 ⑫刀身 ⑬(蓋以外の)本体 ⑭樹皮の内側の材 ⑮金銭

##### (2)複合語の選定

『日本国語大辞典』には数多くの語句が掲載されているが、その中には現代では使用されなくなった物も少なくない。今回の研究で複合語については現代語につながるものに限定することとした。過去に存在して現代に残らなかった語句も、語史を総体として捉えるためには対象にすべきであるが、今回はそこまで力が及ばなかった。

対象とする複合語を選定する方法を記す。まず選定の手段として『新明解国語辞典』『日本語逆引き辞典』を使用した。これらが現代語で使用される語を採用する立場を取っているからである。そして選定方法は、①「身・ー」は『新明解国語辞典』の項目を基準にし、②「ー・身」は『日本語逆引き辞典』によりつつ『新明解国語辞典』も参照した。

##### (3)意味分類と年代配列

このようにして選定した複合語「身・ー」「ー・身」および前述の単純語「身」の多義項目に関する『日本国語大辞典』の記述から必要事項を集めて考察に備えた。市販の表計算ソフトに「語形」「初出文献」「年代」「意味分類(前述の15種)」を入力し、ソフトの並べ替え機能を使って、意味分類ごとに分けて内部を年代順に配列した。

### § 2 調査結果と検討

#### 1 調査結果

まず前章末に記した単純語「身」複合語「身・ー」「ー・身」の意味分類と年代配列の結果を表1に示す。

表1 「身」「身・ー」「ー・身」の意味分類と年代配列

語 形	読 み	意味	年代	出 典
身	み	1	712	古事記
身の皮	みのかわ	1	712	古事記
身の丈	みのたけ	1	712	古事記
身丈	みたけ	1	720	書記
身なり①	みなり	1	720	日本書紀
身罷る	みまかる	1	720	日本書紀
身の毛	みのけ	1	830頃	東大寺諷誦文
御身	おんみ	1	9C末	竹取物語
我が身	わがみ	1	9C末	竹取物語
身じろぎ	みじろぎ	1	10C後	落窪
身柄①	みがら	1	974	蜻蛉
身近い	みちかい	1	10C終	能因本枕
生き身	いきみ	1	13C前	平家
身の代	みのしろ	1	1253	近衛家本式目条々追加
肌身	はだみ	1	1423頃	大観本謡曲－高野物語
身持ち①	みもち	1	1477	史記抄
身売り	みうり	1	1536	塵芥集
身持ち②	みもち	1	1548	運歩色葉
身投げ	みなげ	1	1592	天草本平家
身内①	みうち	1	室町末近世初	虎明狂言本－蚊相撲
身すがら①	みすがら	1	室町末近世初	雲形本狂言－木六駄
身悶え	みもだえ	1	室町末近世初	虎明狂言本－墨塗
身請け	みうけ	1	1612	梅津政景日記
御身	おみ	1	1659	咄本－百物語
身動き①	みうごき	1	1677	西鶴大矢数
身すがら②	みすがら	1	1686	浄瑠璃－三世相
身の代金	みのしろきん	1	1702	伊能文書－元禄十五年
肩身①	かたみ	1	1711	浄瑠璃－薩摩歌
身ごなし②	みごなし	1	1721	津国女夫油
身知らず②	みしらず	1	1760	談義本－豊年珍話
身籠もる①	みごもる	1	1771	談義本－世間万病回春
身ぐるみ	みぐるみ	1	1779	洒落本－蚊不喰呪詛蘇我
総身	そうみ	1	1781	見徳一炊夢
後ろ身①	うしろみ	1	1794	歌舞伎－傾城青陽#
不死身	ふじみ	1	1797	俚言集覽
身空	みそら	1	1809	歌舞伎－貞操花鳥羽恋塚
生身①	なまみ	1	1810	読本－夢想兵衛胡蝶物語
身重	みおも	1	1831	人情本－仮名文章娘節用
身幅①	みはば	1	1867	和英語林集成初版
身近	みちか	1	1902－05	黒潮(徳富蘆花)
細身②	ほそみ	1	1907	駅夫日記(白柳秀湖)
身動き②	みうごき	1	1814－46	松翁道話
身	み	2	1254	古今著聞集
白身	しろみ	2	1269	仙覚抄
刺身	さしみ	2	1448	康富記－文安五年
片身①	かたみ	2	1489	蔭涼軒目録長享三年
上身	うわみ	2	室町末近世初	虎明本狂言－鱸包丁
片身②	かたみ	2	室町末近世初	虎明本狂言－鱸包丁
下身	したみ	2	室町末近世初	虎明本狂言－鱸包丁

語 形	読 み	意味	年代	出 典
白身	しろみ	2	1643	料理物語
揺り身	すりみ	2	1678	俳諧－難波風
脂身	あぶらみ	2	1703	雑俳－すがたなぞ
黄身	きみ	2	1703	俳諧－広原海
打ち身①	うちみ	2	1714	浄瑠璃－天神記
剥き身	すきみ	2	1719	浄瑠璃－平家女護島
骨身	ほねみ	2	1729	狂歌－華紅葉
作り身	つくりみ	2	1757	洒落本－浪花色八卦
剥き身	むきみ	2	1773	咄本－千里の翅
切り身	きりみ	2	1801	洒落本－恵比良濃梅
笹身	ささみ	2	1859	歌舞伎－小袖曾我薊色縫
赤身②	あかみ	2	1874	小学読本
生身②	なまみ	2	1891	宝の山(川上眉山)
赤身①	あかみ	2	1910	小鳥の巢(鈴木三重吉)
身欠き鯨	みかきにしん	2	1929	不在地主(小林多喜二)
打ち身②	うちみ	2	13C中後	世俗立要集
青身	あおみ	2		
とろ身	とろみ	2		
身	み	3	8 C	万葉
身代わり	みがわり	3	970－999	宇津保－国譲
身銭	みぜに	3	1592	高野山文書－文禄二年
身勝手	みがって	3	1746	浄瑠璃・菅原伝授手習鑑
身共	みども	3	1480頃	謡曲－夜討曾我
身鼈肩	みびいき	3	1832－33	人情本－春色梅児誉美
身の回り	みのまわり	3		
身	み	4	8 C後	万葉
身の上	みのうえ	4	8 C後	万葉
身なり②	みなり	4	10C後	落窪
憂き身	うきみ	4	951－53	後撰集
身の程②	みのほど	4	974	蜻蛉
一人身	ひとりみ	4	1001－14	源氏－末摘花
身繕い	みづくろい	4	1081頃	書陵部本名義抄
空身	からみ	4	1128	三木奇歌集
身軽	みがる	4	1563	玉塵抄
身過ぎ	みすぎ	4	1563	玉塵抄
影身	かげみ	4	室町末	車屋本謡曲・元服曾我
身拵え	みごしらえ	4	室町末近世初	虎広本狂言－二人袴
親身②	しんみ	4	1648	説経－説経しんとく丸
身嗜み①	みだしなみ	4	1660	狂言記－吟婿
身じまい	みじまい	4	1678	色道大鏡
死に身②	しにみ	4	1707	丹波与作待夜小室節
身嗜み②	みだしなみ	4	1708	浄瑠璃－雪女五枚羽子板
死に身①	しにみ	4	1709	心中刃氷朔日
身幅③	みはば	4	1746	浄瑠璃－菅原伝授手習鑑
身性②	みじょう	4	1803	洒落本－甲斐雪折笹
身奇麗	みきれい	4	1834	人情本－恩愛二葉草
肩身②	かたみ	4	1894	大つごもり－樋口一葉
捨て身①	すてみ	4	1899	福翁自伝
捨て身②	すてみ	4	1908－09	妻(田山花袋)
身支度	みじたく	4	1716頃	葉隠

語 形	読 み	意味	年代	出 典
身	み	5	905-914	古今
身の程①	みのほど	5	10C終	枕草子
身柄②	みがら	5	1254	古今著聞集
身元	みもと	5	1678	色道大鏡
身分	みぶん	5	1688	浮世草子-人倫糸屑
親身①	しんみ	5	1711	浄瑠璃-冥土飛脚
身性①	みじょう	5	1812-18	滑稽本-四十八癖
身知らず①	みしらず	5	1895	やみ夜(樋口一葉)
身分証明書	みぶんしょうめいしょ	5	1929-30	浅草紅団(川端康成)
身元保証	みもとほしょう	5	1933	身元保証に関する法律
身分権	みぶんけん	5		
身	み	6	913	亭子院歌合
身震い	みぶるい	7	10C終	枕草子
身構え	みがまえ	7	1500頃	両足院本山谷抄
当て身	あてみ	7	1667	評判記-吉原雀
身振り	みぶり	7	1682	浮世草子-好色一代男
受け身①	うけみ	7	1721	浄瑠璃-信州川中島合戦
身	み	7	1772	噺本・鹿の子餅
身籠もる②	みごもる	7	1773	俳諧新撰
浮き身②	うきみ	7	1814	滑稽本-素人狂言紋切形
反り身	そりみ	7	1857-63	滑稽本-七偏人
受け身②	うけみ	7	1875	文明論之概略(福沢諭吉)
半身	はんみ	7	1936	漫才読本(横山エンタツ)
身ごなし①	みごなし	7	1941	医師高間房一氏(田畑修一郎)
変わり身	かわりみ	7	1957	日本拝見一千歳(中野好夫)
移り身	うつりみ	7	1964	薪能(立原正秋)
浮き身①	うきみ	7	1924-25	竹沢先生と云ふ人(長与善郎)
差し身	さしみ	7		
寄り身	よりみ	7		
身	み	8		
身	み	9	1563	玉塵抄
身内②	みうち	9	1563	玉塵抄
身寄り	みより	9	1703	雑俳-日本国
身頃	みごろ	10	15C前	三議一統大草子
四つ身	よつみ	10	1694	俳諧-熊野からす
一つ身	ひとつみ	10	1775	雑俳-柳多留
三つ身	みつみ	10	1907	枯菊の影(寺田寅彦)
後ろ身②	うしろみ	10	1920	家事研究(長尾糸)
身	み	10	1837-53	守貞漫稿
身幅②	みはば	10	1933-37	若い人-石坂洋二郎
身八つ口	みやつくち	10		
身	み	11	905-914	古今仮名序
中身	なかみ	11	1874-76	東京新繁盛記
身	み	12	712	古事記・歌謡
細身①	ほそみ	12	16C中	歌謡-田植草紙
抜き身	ぬきみ	12	1659	仮名草子-身の鏡
本身	ほんみ	12	1708	浄瑠璃-雪女五枚羽子板
身	み	13	10C終	枕草子
身	み	14		
身	み	15	1935	隠語構成様式并其語集

意味分類の6・8・13・14・15は複合語が無く単純語のみであるが、他は複合語とあわせて複数になり所属語は意味によって多少が有る。この表を一覧して語史の問題として思い浮かぶのは次の点である。①一つの意味分類内部での語史、②各意味分野どうしの新古と派生関係。まず次項で後者②について考察し、次々項で①について考察する。

## 2 意味分野どうしの新古と派生関係

各意味分野どうしの新古を解明する手がかりとして、掲載された初出例の年代を比べてみる。初出例は研究の深化によって変わってくることも有り、文献初出ということはその時点で創造された語を除けばそれ以前から存在したものが多数と見るべきであるから、あくまで参考に過ぎない。その点を念頭に置きつつ各意味分野の初出文献と年代の一覧を表2に上げる。なお、意味分野の簡略表記だけでは分かりにくいので『日本国語大辞典』の説明と用例を引用する。

表2 各意味分野の初出年代

意味分野	／	初出文献と年代	／	『日本国語大辞典』説明と用例
①身体	712	古事記		
「身」①人間、または他の動物のからだ。身体。肉体。				
※古事記(712)下・歌謡「日下江の入江の蓮 花蓮 微(ミ)の盛り人 羨しきろかも」				
②刀身	712	古事記		
「身」②刀剣の鞘(さや)の中におさまっている部分。刀身。「抜き身」。				
※古事記(712)中・歌謡「やつめさす出雲建が佩ける太刀 黒葛(つづら)さは巻き さ味(み)なしにあはれ」				
③自身	8C	万葉集		
「身」③その人のからだの意から転じて、その人自身。自身。特に他人に対して、おのれ自身をいう。				
※万葉(8C後)一・五〇「其を取るとさわく御民も 家忘れ身(み)もたな知らず 鴨じもの水に浮き居て(藤原京の役民)」				
④ありさま	8C	万葉集		
「身」④その人自身の有様、またはその人の立場。身の上。身のさま。				
※万葉(8C後)五・九〇三「倭文手纏(しつたまき)数にもあらぬ身(み)にはあれど千年にもがと思ほゆるかも <山上憶良>」				
⑤地位	905	古今集		
「身」⑤その人自身が世に占める地位。その人自身の分限、程度。身分。分際。身のほど。				
※古今(905-914)雑体・一〇〇三「身はしもながら ことの葉を あまつそらまで きこえあげ <壬生忠岑>」				
⑪内容	905	古今集仮名序		
「身」⑪容器、外殻、外観などに対してなかみをなすもの。内容。実質。→実④				
※古今(905-914)仮名序「文屋の康秀は、言葉はたくみにて、そのさま身におはず」				
⑥生命	913	亭子院歌合		
「身」⑥命あるからだ。生命。延喜十三年亭子院歌合(913)「人恋ふとはかなき死にをわれやせむ みのあらばこそ後も逢ひ見め」				
⑦身振り	10C終	枕草子		
「身」⑦からだのこなし。身ぶり。恰好(かっこう)。また、声色などと同様に、見せ物としての身振りをいう。				
※嘶本・鹿の子餅(1772)焙禄売「酒屋は遠しと少し案(あんじ)る身(ミ)ありてうなづき」				
⑬(蓋以外の)本体	10C終	枕草子		
「身」⑬容器の蓋(ふた)に対して、物をいれる側、また昔の鏡などのように蓋つきの器物で、蓋に対して本体の方。枕(10C終)八七・職の御曹司におはします頃、西の廂にて「身は投げつとて、蓋のかぎり持て来たりけん法師のやうに」				
②肉	1254	古今著聞集		
「身」②骨、皮に対して、人間や鳥、獣、魚、貝などの肉をいう。しし。しむら。				
※古今著聞集(1254)二〇・六九六「白虫の、みもなくて、やせがれていまだあり」				
〔「実」④中身。内容。→身(み)⑪〕				
※万葉(8C後)一二・二七九七「住吉の浜に寄るといふうつせ貝実(み)なき言もち余(あれ)恋ひめやも」				



意味分野 / 初出文献と年代 / 『日本国語大辞典』説明と用例		
⑨身内	1563 玉塵抄	「身」⑨その人に関係の有る者。その人の縁者。身内。また、自分の側に属する人。味方。また、博徒、やくざの用語で、一家の者。玉塵抄(1563)一六「此の詩は幽王のをちあになどの親類骨肉のほねししになる衆が幽王の親類をちかつげ身にせいで讒佞のわるいとをいあだになる者を信じてしたしうせらるるをうらみそしつた詩なり」
⑩衣類の胴	1837～53随筆・守貞漫稿(15C前 三議一統大草子)	「み」⑩衣類の袖(そで)、襟(えり)、衿(おくみ)を除き、胴体を覆う部分。本身、四つ身、三つ身、一つ身などという。身ごろ(みごろ)。 ※随筆・守貞漫稿(1837～53)一五「此裾には身前後左右四ヶ各長一尺並びに左右の衿下二尺許を縹或はうす色にす」 (「みごろ【身頃・裯】」衣服で、袖、襟、衿(おくみ)などを除き、体の表と背面を被う部分。和服では表背とも各二布(ふたの)ずつでできている。 ※三議一統大草子(15C前)「袖は外へなり、身ころは内へなるやうに懸て持べし」)
⑭樹皮の内側の材	φ (1874 小学読本)	「身」⑭木材で樹皮の内側にある材の部分。「赤身」「白身」。 (「赤身」②木材の中心の赤みを帯びた部分。心材。←しらた。 ※小学読本(1874)「杉は材赤きを、赤みと称へてこれを重ず」)
⑧誠心	φ (1906 破戒)	「身」⑧自分が何かやろうとする心。誠心。み(身)が入る②・み(身)を入れる②。 (「身が入る」②気が乗って一心になる。一所懸命になる。熱中する。実が入る。 ※破戒(1906)島崎藤村)
⑮金銭	1935 隠語構成様式并其語集	「身」⑮(財布のなかみの意か)金銭をいう、盗人仲間の隠語「隠語校正様式并其語集(1935)」

表2をさらに簡略にして、上代・中古以下の各時代に①～⑮の意味分類の初出を配分してみると次のようになる。この一覧から幾つかの点が明らかになる。

[上 代] ①身体 ③自身 ④ありさま；⑫刀身  
(実④中身、内容)

[中 古] ⑤地位 ⑥生命 ⑦身振り；⑪内容  
⑬(蓋以外の)本体

[中 世] ⑨身内；②肉

[近 世] ⑩衣服の胴

[近現代] ⑧誠心；⑭樹皮の内側の材 ⑮金銭

まずセミコロンの左右を比べると、左側は「人の身体」に関わりそこから派生した語義である。右側は「皮や蓋や鞘に覆われた中身」という共通性のある語義である。この「身体」と「中身」の2系列は上代から後世まで並び立っている。

知見1 「み(身)」の語義は、古来「身体」と「中身」の二つがあり、後世まで並び立ってきた。

それでは「身体」と「中身」はどちらが先なのか。同根とされる「み(実)」は「植物の果実または種子」をさし「皮や殻に覆われた中身」であるが、人や動物の「み(身)」も「皮や殻に覆われた中身」であることが共通する。

知見2 「何かに覆われた中身」を指す「み」が、「植物の果実または種子(実)」と「肉を持った(人や動物の)身体(身)」に分化するが、共通性は残る。

「身」に限って言えば、こうした「皮の中の中身」という具体性をもつ語義が先に有って、そこから「皮に覆われた肉をもつ肉体」さらに「身体」という抽象的な意味をも表現できるように変化したのであろう。一般に意味変化の方向として「具体から抽象へ」という傾向があることが指摘されているのである。

知見3 具体から抽象へという語義変化の傾向に即して、始めに「中身」から「身体」への意味変化が起き、それがもとの「中身」と並び立たと判断される。

### 3 「身体」と「中身」の内部変化

次に「身体」と「中身」の内部での語義の発展について考察する。

#### (1)「身体」

前記の一覧からセミコロンの左側を摘記すると次のとおりである。

[上 代] ①身体 ③自身 ④ありさま  
[中 古] ⑤地位 ⑥生命 ⑦身振り

[中 世] ⑨身内

[近 世] ⑩衣服の胴

[近現代] ⑧誠心

上代では、①の「(人)身体」つまり「肉を備えた実体」を指す語義を起点として、そのような身体を持った個々の②「(人)自身」の語義となるとともに、彼らの属性として④「ありさま」つまり「社会的な位置」の語義に広がった。

中古では、上代の④「ありさま」を明確にした⑤「地位」が生まれた。いっぽう、身体は生命をもっていることが前提で生命が無ければ単なる「むくろ(死骸)」「からだ」になる(注3)ことから、「身が有る間」「身が(を)持つ」のような文脈で⑥「生命」の語義となった。また身体は意志のないし無意志的にいろいろな動きをすることから⑦「身振り」の語義にも用いるようになった。

中世では、自身の周辺で家族同様の近い範囲にある人々を「身内(みうち)」と捉えたことから「身」だけでも⑨「身内」を指す用法が現れた。

近世では、衣服で被う身体の主要部として意識され「みごろ」と呼んだが「身」だけでも⑩「衣服の胴」を指すようになった。

近現代では、仕事などにおいて動作と精神活動が身体いっばいに充実する感じを「身が入る」「身を入れる」と表現するようになり⑧「誠心」の用法になった。

このように歴史的な語義の展開を無理なく解釈し説明することができる。

## (2)「中身」

前記一覧のセミコロンの右側を列記すると次のとおりである。

[上代] ⑫刀身 (実④中身、内容)

[中古] ⑪内容 ⑬(蓋以外の)本体

[中世] ②肉

[近現代] ⑭樹皮の内側の材 ⑮金銭

これらは何かに覆われた「中身」という共通点を持ちつつ、各時代でさまざまな語義が現れたと見て問題は無い。

上代では、鞘に覆われた中身である⑫「刀身」や、殻に覆われた貝の身・実(実④)などを「み」と呼んでいる。

中古では古今集仮名序の六歌仙評で「表面的な言葉の巧みに内実が伴っていない」という文脈で「言葉はたくみにて、そのさまみにおはず」と記すような⑪「内容」の語義にも用いた。また鏡の蓋以外の⑬「本体」も「身」と呼んだ。

中世に初めて②「肉」の初出が来ているが、じつは上代に「貝のみ(実④)」の例が有り、これも植物の果実ではない動物の肉と言えるから、「肉」の語義は古来存在したと見るべきである。

近現代に⑭「樹皮の内側の材」の「身」の初出があ

るが、近世の複合語「赤身」に既に見えている語義であるから、自立用法が遅れたと解するべきか。盗人の隠語⑮「金銭」は、財布の中身を「なかみ」と言えば余人にも分かるので「み」と略したのである。

知見4 「身体」と「中身」の歴史的な内部変化は無理なく説明できる。

## §3 結論と今後の課題

以上、『日本国語大辞典』の「身」「身・一」「一・身」を意味分類と時代順に並べ替えて考察してきた。その結論は次のことである。

- ①「何かに覆われた中身」を指す「み」が、「植物の果実または種子(実)」と「肉を持った(人や動物の)身体(身)」に分化するが、共通性は残る。
- ②「み(身)」の語義は、古来「身体」と「中身」の二つがあり、後世まで並び立ってきた。
- ③具体から抽象へという語義変化の傾向に即して、始めに「中身」から「身体」への意味変化が起き、それがもとの「中身」と並び立っていると判断される。
- ④「身体」と「中身」の歴史的な内部変化は無理なく説明できる。

図示すれば

み(皮やからに覆われた中身)→実(植物)

→身(動物)→身体

→中身

なお本稿では詳しく考察しなかったが、「み(実)」は「実質」の語義にもなり、文脈によっては「み(身)」の「中身」と区別し難いあいもある(注4)。

今後に残った課題として、複合語「身・一」「一・身」の全てについての語史研究、「身」を含む成句の語史研究、「実」の語史研究との重ね合わせなどがある。他日を期したい。

## [注]

- 1 『日本国語大辞典』『大辞林』などの辞書で「み(身)」の項目頭に「み(実)と同語源」「み(実)と同源」と注し。逆に「み(実)」の項には「み(身)」と同語源(同源)と注記している。
- 2 国語学会『国語学辞典』(東京堂出版、1955年初版)の「複合語」の一節に古形保存の具体例が見える。  
語構造上、複合語に属すべき単語は国語の語彙のうち相当な数に上るが、中には「なべ(菜釜)」「さかな(酒菜)」「たそがれ(誰そ彼)」のように、現在もはやその語源が忘れられて、複合語意識の薄れてしまったものも多い。  
「さかな」「たそがれ」から、かつて副食を「な」と呼んだことや、「かれ(彼)」を目前の2人称者にも用いていたことが分かる。現代では「な」「かれ」のその語義はなくなり複合語の中にだけ古形が保存されて化石のように残っているのである。
- 3 佐竹昭広氏は「からだ」という語が生命のない「むくろ」と同じ語義に用いられた事実を『日葡辞書』など多くの例を挙げて考証しておられる。(佐竹昭広「意味変化について」『万葉集抜き書き』pp.123-134)

- 4 たとえば「みのある話」「みのない話」の「み」は「話の実質的内容」であって「身」とも「実」とも解しうる。「身」は実質としての「肉」であり、「実」は見て美しい花に対して食べられる実質の有る「果実」である。本稿の資料で言えば『日本国語大辞典』では「み(身)」⑩に、古今集仮名序の「言葉はたくみにて、そのさまみにおはず」の例(実質が無いの意)を上げているいっぽうで「み(実)」④の用例の※万葉(8C後)一二・二七九七「住吉の浜に寄るといふうつせ貝実(み)なき言もち余(あれ)恋ひめやも」も上げている。これは序詞で「うつせ貝(虚せ貝)のようにみもない言葉」という文脈で、貝の身が無いのと言葉の実が無いのを掛けている。単に「み」の同音だけでなく「身」と「実」の「実質」という共通点を利かせているであろう。

〔調査対象文献〕

- ・『日本国語大辞典』2版、全14冊(小学館、2001年)
- ・北原保雄編『日本語逆引き辞典』(大修館書店、1990年)
- ・『新明解国語辞典』5版(三省堂、1997年)

〔参考文献〕

- ・『大辞林』2版(三省堂、1995年)
- ・教科研東京国語部会・言語教育研究サークル『語彙教育』(麦書房、1954年)
- ・佐竹昭広「意味変化について」『万葉集抜き書き』(岩波書店、2000年、現代文庫。初出：『言語生活』204、1968年)